

## 巻 頭 言

看護学科の教育目標の一つに「自ら積極的に問題を発見してそれを解決し、研究する態度を身につける」が挙げられています。大学に入学した学生にとっては、高校生から大学生になった矢先、自ら積極的に学び、考えてどう行動すべきかに戸惑うというのが実情ではないでしょうか。

しかし、幸いにも本学のほとんどの学生は、看護学実習が終了する4年生の前期までには「自ら積極的に学ぶ」姿勢が養われていると考えられます。そして、4年生後期では、積極的に看護上の疑問や関心を明らかにする「看護研究」の過程を踏むことにより、問題解決能力への素養が培われていると考えます。この素養は、看護職として無限の可能性を持って卒業する学生にとっての大事な基本であります。

一方、教員自身にこそ、この教育目標の姿勢が備わっているかが問われ、日々研鑽する努力が必要なのではないでしょうか。教員として「なぜ」、「どうして」を常に問いながら研究や教育をしていく姿勢が不可欠です。大学教員は、「教育・研究・社会貢献」を柱とした日々の研鑽が強く求められています。最近では年々、教育に費やす時間が増えていっていることも事実です。毎年の自己評価を記述しながら、1年間の研究業績を振り返り、この研究が看護実践に役立っているのか、教育や社会に貢献する内容であったのかを吟味していくことが重要です。研究は研究者自身の自己満足であってはならないと戒めています。

査読者の教育的配慮による査読と執筆者の返答のやりとりを行う過程の中で、執筆者はより良い論文を作成していくことが可能となります。編集委員会は締め切り期限を考慮し、その機会を可能な限り提供していくことが大事と考えます。また、「査読のレビュー」つまり、査読が適切に行われ、適切な内容であったかを検討するなどいくつかの課題は残っていますが、次の編集委員会の課題として引き継いでいただければ幸いです。

看護学は、医学などの他分野と比較すると、まだまだ学問として未成熟であると認めざるをえません。そして、看護研究を公表する国内外のジャーナル数も限られているのが実情です。若手研究者を育てるという目的である当ジャーナルに今年も15編の投稿をいただきました。そして、馬場学長のご配慮により本誌を発行することができましたことを心より感謝し、このジャーナルが看護学の発展に多少とも貢献できることを願っています。

平成22年2月

滋賀医科大学看護学ジャーナル  
編集委員長 畑下 博世